

# 高低差の多い地形を生かした公園の設計

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻  
1190152 松榮 友里  
指導教員 重山 陽一郎

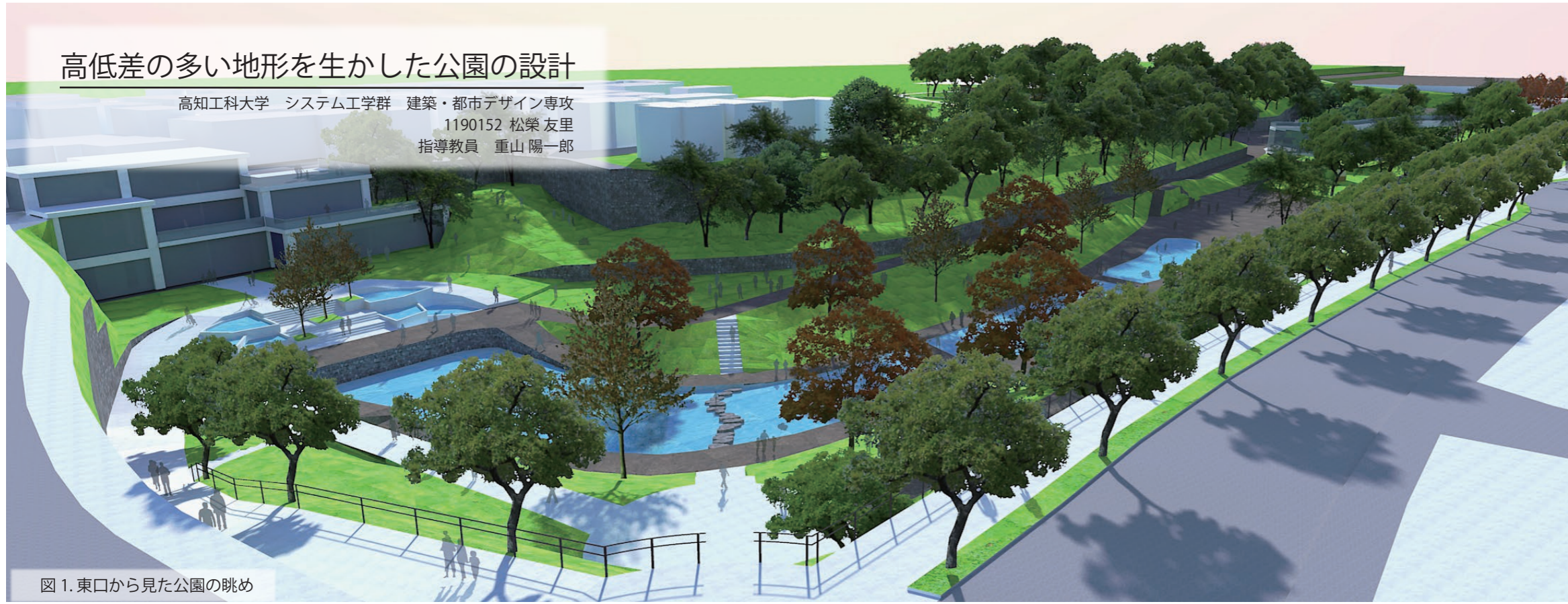


図 1. 東口から見た公園の眺め

## 1. 背景と目的

伏見桃山には、かつて、豊臣秀吉、徳川家康らが築いた伏見城があった。伏見城の廃城後、農産物として数万本の桃が植えられ、桃の生産地としても、花見の名所としても有名だった。しかし、戦後、桃の木は宅地開発に伴い伐採された。現在の桃山という地名はその名残である。

今回の対象敷地である伏見北堀公園（以下北堀公園）は、伏見城築城当時の北側にあった外堀の遺構を利用した公園で、堀が地形としてそのまま残っている。高低差に加え、四方を木が囲んでいることで、暗く近寄りにくい印象を与えている。当時の伏見城が残っていないため、歴史的価値は認められていないが、遺産の継承をする意味でも、埋め立てをせずに、この公園を整備する。そして、人々が気軽に訪れたい、公園自体の魅力を高めた空間づくりを目的とする。

## 2. 現状と課題

### ・北堀公園と伏見桃山運動公園

計画する上で、隣接する伏見桃山城運動公園との関係性を考慮する。（図 2）

北堀公園と隣接している、伏見桃山城運動公園は 2007 年に再整備され、現在、伏見城の模擬天守がある。また、野球場やグラウンドもあるため、運動公園としての利用も多い。

観光地としての印象が強い伏見桃山城運動公園に比べ、北堀公園は地域住民の利用が主である。

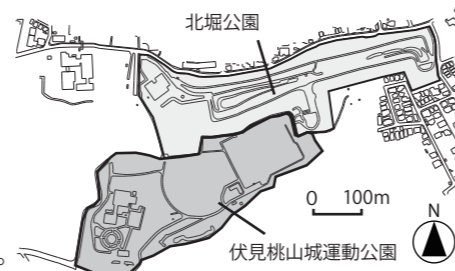


図 2. 伏見桃山城運動公園との位置関係図

### ・見通しについて

現在、周囲を柵で囲われており、柵から堀底まで樹木が覆っているため、覗いても中がほぼ見えない。このように、公園外部から公園の様子が分からないため、地域と分断されているような、近寄りにくい印象を受ける。

### ・ゾーニングについて

公園内を 3 つ（西部/中部/東部）に区分けする。（図 3）西部は、体育館やトレーニングルーム、テニスコートなどがあり、人々の活動拠点となっている。調整池は常時立入禁止である。中部には滑り台などの遊具があるが草木が生い茂ってひと気がない空間となっている。東部は、池があるが流れがなく、水遊びの場にはなっておらず、また、『憩いの場』という場所もあるが、草木が生い茂っているため、入ることができない。

散策コースは、西部↔中部↔東部を繋ぐ、1 周 1155m、約 20 分で回れるコース。ウォーキングやランニングをする人を見かける。

このように、西部に比べ、中部、東部は大きな目的地がなく、どちらも散策コースの通過点でしかない。また、子供のための遊び場空間がほとんどなく、子供の姿もあまり見かけない。

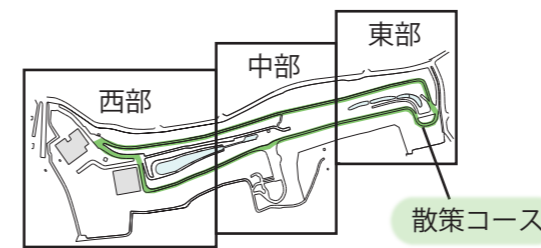


図 3. 区分け図

### ・高低差について

堀を利用した公園のため、高低差があり、木々に覆われ閉鎖的な空間である。（図 4）

周囲と堀底との高低差は、西部で約 8m、中部・東部で約 14.5m ある。

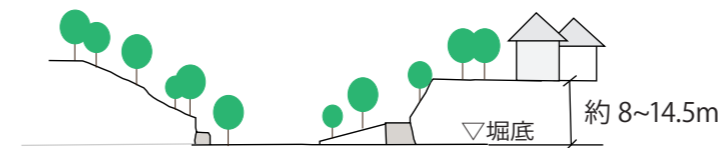


図 4. G.L. と堀底の高低差略図

## 3. 計画方針

隣接する 2 つの公園は、差別化を図ることで、どちらも魅力のある場所にしたいと考える。

2. 現状と課題から、「北堀公園らしさ＝地域住民に向けた公園」であることと考える

テーマを**地域に開かれた公園**とした。

テーマに基づき、設計方針として大きく 2 つ設定した。

### (1) 高低差を活用した空間づくり

高低差の多い地形を生かした空間を提案する。入り口を増やし、階段や橋を設けることで、公園の各ゾーンへのアクセスを向上させ、東西に長い風景を区切ることに繋がる。北側は、樹木を減らし、歩道を新たに設けることで、地域からも見通しのいい安全な空間へ改善し、地域に開かれた印象を与えることができる。

また、園地と車道が高低差を介し、直接接していないことも、高低差がある公園の利点であり安全性が高いと言える。夜間は、入口を施錠をすることで立ち入りを禁止する。

### (2) 東部までどの世代にも魅力ある空間へ

西部だけでなく、中部・東部に役割を持たせることにより、人々の目的地を分散させることができ、人が集まる空間を現在よりも増やすことができる。これが、公園全体としての空間の広がりにつながる。西部の、調整池については、豪雨や増水などの危険な場合を除き、池として活用する。

中部には、地域に開かれた公園というテーマから、どの世代にも魅力のある居場所をつくるため、特に不足している子供達の遊び場空間を充実させる。森の中を意識した、自然豊かなゾーンとする。

東部は、福祉施設を中心に、小さな子供からお年寄りまで幅広い世代がのんびり過ごせる親水公園を提案する。

また、公園全体として、桃の木を植栽し、かつての伏見桃山の風景を取り戻したい。どの世代にも魅力的な公園とすることを意識し、設計する。

**西部：桃が迎える正門で伏見の名所を取り戻す**

正門は、車と人の入り口を別々にし、歩車分離を図る。再び伏見桃山を桃の名所とすべく、正門から調整池に続く坂道は桃並木とする。(図5)

今まで封鎖され、水面まで高さの距離もあったため、近寄ることのできなかった調整池は、段差を芝生の坂にすることで、水辺まで近づけるようにした。また、中段からは、調整池を見渡すことができる。(図6)



図5. 桃の坂道

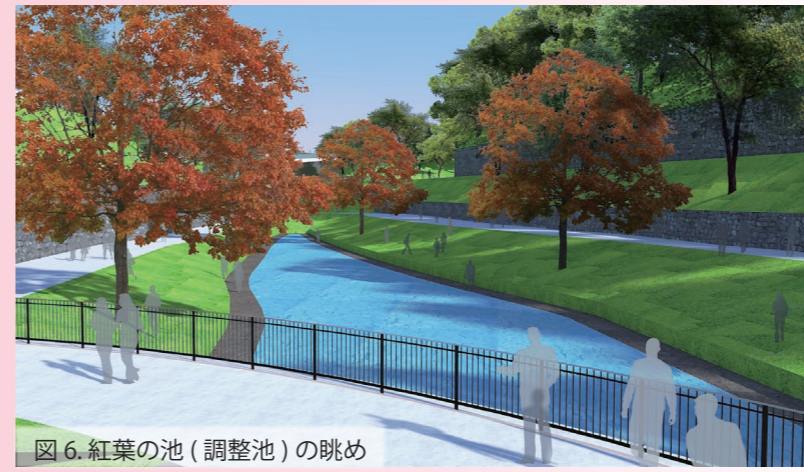


図6. 紅葉の池(調整池)の眺め

**東部：見晴らしのいい親水公園**

東部は、北側の樹木を最小限にし、見晴らしのいい空間とする。  
親水公園は、高低差を使い、常に水が流れる状態を作る。西に向かって徐々に水深を深くすることで、子育て支援センターの付近で小さい子供も安全に遊ぶことができる。また、壁の圧迫感の軽減と急な坂の活用を目的とし、東部の一角には芝そり場を設けた。

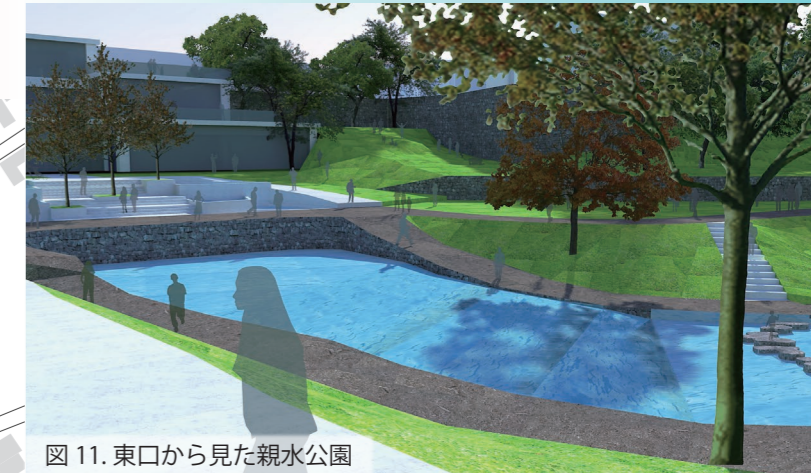


図11. 東口から見た親水公園

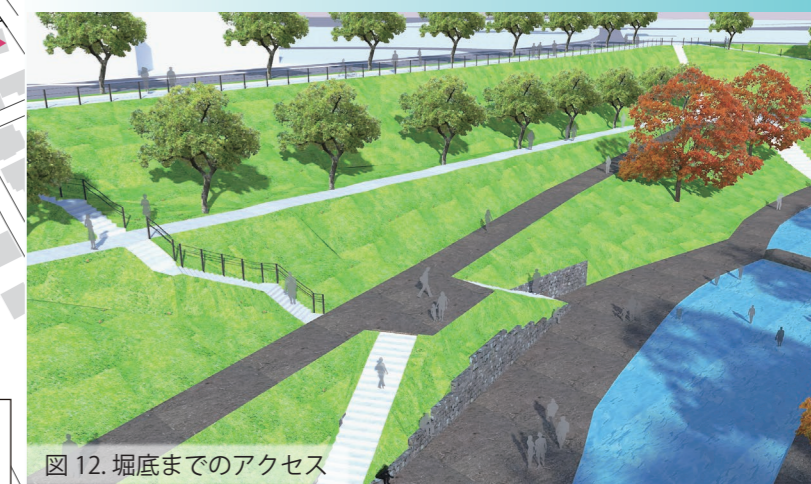


図12. 堀底までのアクセス

現在、北側前面道路にある柵は、高さ約2mで、柵から公園内の傾斜までに5~7mの距離がある。そのため、堀底がほぼ見えない。また、前面道路南側(公園側)には歩道がない。そこで、柵から傾斜の公園敷地内に遊歩道を設ける。歩車分離を図ると同時に、公園との境界線が和らぎ、開かれた公園に繋がる。

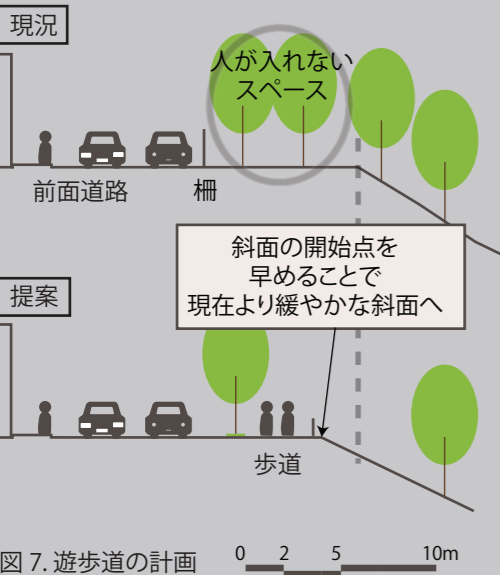


図7. 遊歩道の計画

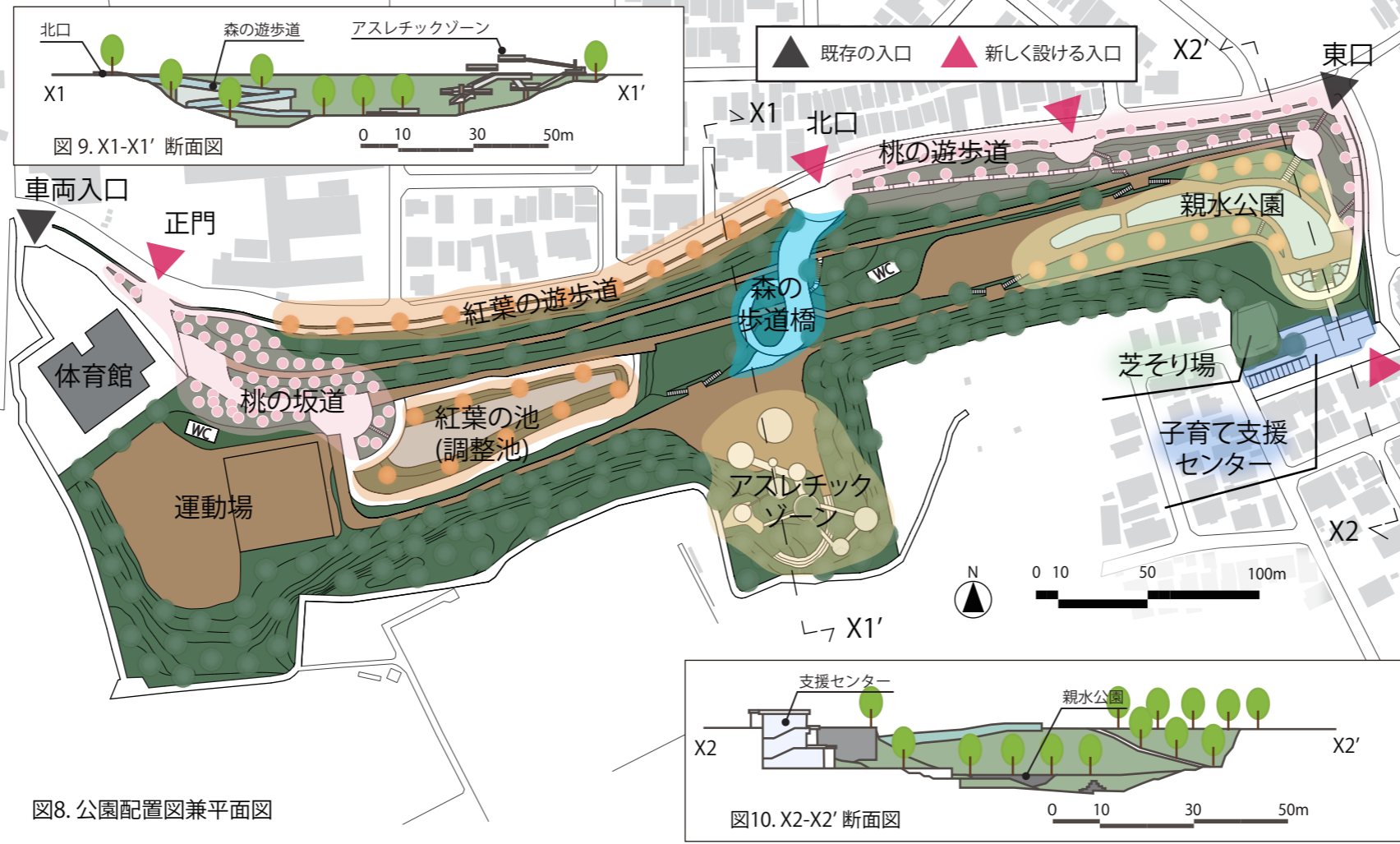


図8. 公園配置図兼平面図

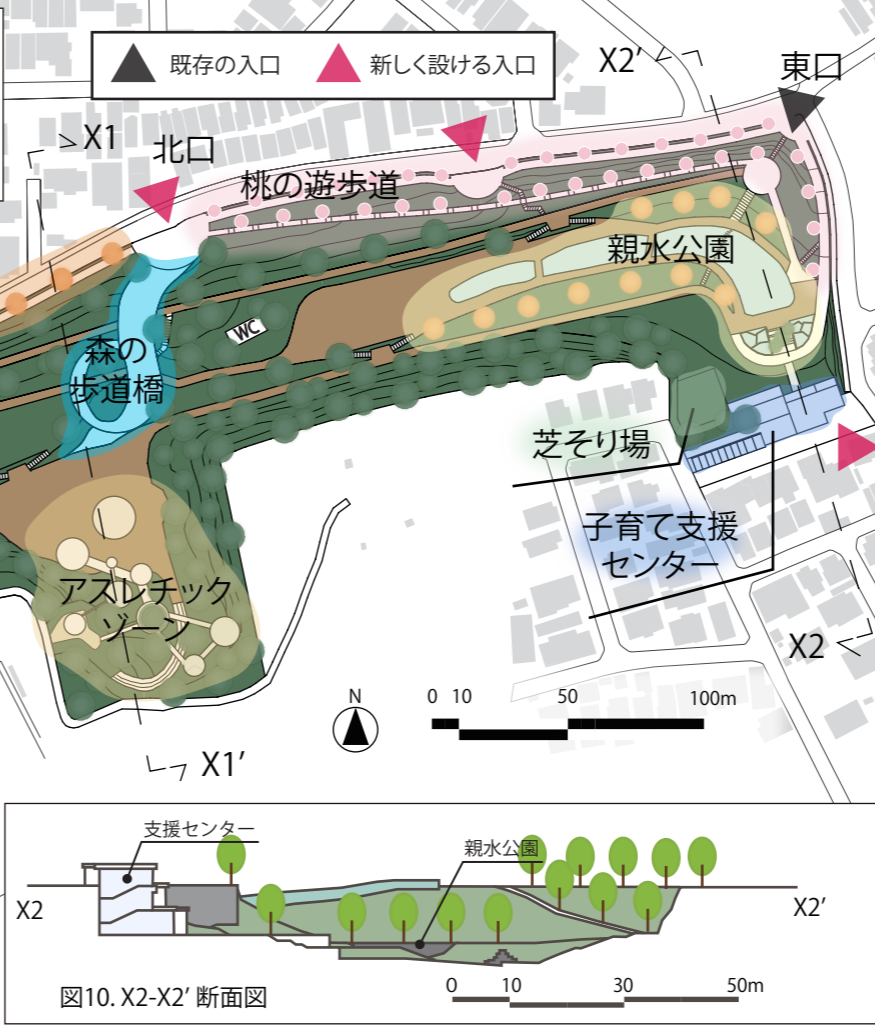


図9. X1-X1' 断面図

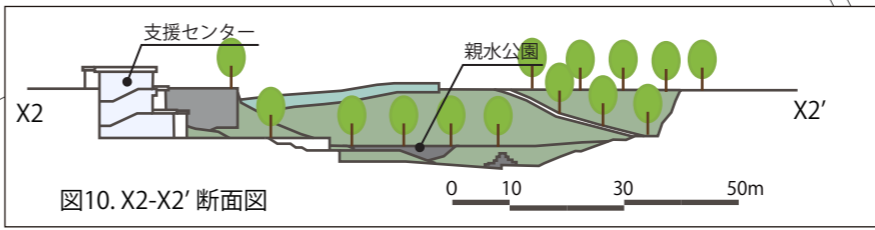


図10. X2-X2' 断面図

**中心部：自然豊かなアスレチックゾーン**

新しく北口を設けた。北口から延びる歩道橋は、緩やかに下りながらアスレチックゾーン、堀底へと続いている。歩道橋を歩くと、生い茂っている木々の間から、徐々に見える森の中のアスレチックゾーン。滑り台やターザンロープ、丸太渡りなどのアスレチック遊具が、高さ1m~16mまでの様々な高さで設置されており、子供だけでなく、大人も楽しむことができる。



図14. アスレチックゾーンからの視点

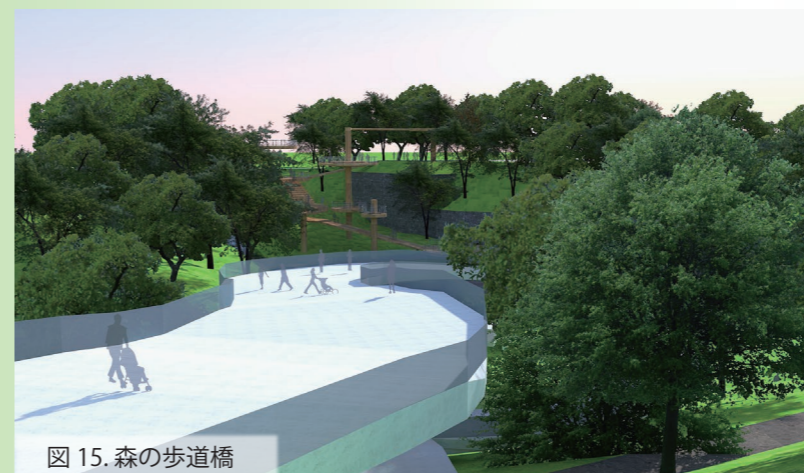


図15. 森の歩道橋

**子育て支援センター**

親子が気軽に来ることができるよう、公園と併設する。エレベータを設置することで、地上から堀底までのアクセスを容易にし、センターと公園の自然な繋がりが生まれ、公園との境界線が和らぐ。また、各階から外に出ることが可能で、地下1階は芝そり場と繋がっている。



図13. 子育て支援センターと芝そり場